

# 所信表明

## 二〇二五年度中央常任副委員長選挙所信表明

中央常任副委員長区分の立候補者は二名です（定数若干名）

中央常任副委員長候補①

産業社会学部 三回生

蹴揚彩華（けあげ さやか）

この度、2025年度中央常任副委員長に立候補させていただきました、産業社会学部3回生の蹴揚彩華と申します。本課では、産業社会学部メディア社会専攻と社会調査士過程に所属しております。課外活動としては、学内外問わずの短期留学プログラムに参加すると同時に、学友会活動に取り組んでまいりました。本所信表明では、約3年にわたる学友会活動の振り返りと、その活動を通じて見出した中央常任副委員長としての展望を軸に述べさせていただきます。

### 【これまでの活動について】

まずは、私のこれまでの各団体での活動を通して行ったこと・学んだことについて説明させていただきます。

〈中央事務局 2022年度～2023年度：局長補佐〉

私は、学部一回生の春に中央事務局に入局いたしました。何か大きなことに関わり

たいけれど、③部(財務部・調査企画部・特別事業部)のどこもじっくりこないと当時の中央事務局長に相談したところ、「それであれば中央事務局ひいては学友会を俯瞰できる局長補佐をやってみないか」と、お声がけいただきました。そのような経緯から、1、2回生の間では局長補佐を務めさせていただきました。局長補佐としての具体的な活動として、①中央パトリリーダーズキャンプ(以下、中パリ)の実施、②五者懇談会等の各種懇談会への出席、③りつくり2022への参加があげられます。

まず、中パリに関しては、コロナ禍で数年にわたり中止されていた中パリを時代に合わせた形で開催しました。対面での開催ということで、コロナ禍明けの制約はありませんでしたが、当時の学友会の課題の一つが2言語化の推進だったことから立命館大学アジア太平洋大学(以下、APU)との交流を実施しました。コロナ禍以前に行われていた中パリは近畿地方の旅館に宿泊し学友会の研修をするというものでした。そのため、他大学との交流し学友会を客観視してもらえるように、という新しい試みに挑戦いたしました。この挑戦は、様々な方のご協力を得て成功裏に収めることができました。2年生では、局長と私だけで運営するのではなく、同学年のメンバーとともに前年の中パリを発展させられるように尽力しました。前年の中パリ後のアンケートを反映し、同じ規模間で学生自治を行っている大学との交流や意見交換を目的として福岡大学との交流を行いました。その中でも、中央パート参加者同士の交流を行うことができた中パリを実現しました。この2回の中パリを通じて、中央パートのつながりを創出できた実感しています。また、中パリを通じて、中パリ参加者にこれまで接点のなかった部署の人と話す機会が生まれ、その結果としてその部署に加入するきっかけと

なったケースや、同じ自治会同士のメンバーが交流を深め、他自治会の優れた取り組みを自分たちの自治会に取り入れる動きが見られました。これらの経験を通じて、私は「交流がもたらす成長」の重要性を実感しました。加えて、運営側として交流の場を設計し、全体を俯瞰して調整する力を養うとともに、参加者間の相互作用が学友会全体の活性化につながることを学びました。私が最初に学友会で関わった活動も2年間とも関わった活動も中パリです。(2回生での関わりについては、中央常任委員長補佐のパートで言及させていただきます。)中パリでは、本当に様々な方と関わらせていただいたとともに、私自身も学友会について考える機会でありました。このように中パリに関わる中で、学友会内でのつながりの創出や研修制度という部分に、今後の学友会をさらに発展させるためのヒントがあるのではないかと考えるようになりました。

五者懇談会等の各種懇談会にも、議事録担当であった関係から一回生から積極的に参加させていただきました。特に、2022年度の五者懇談会は、私にとってとても衝撃を受けた機会となりました。私は、中央事務局に入局してから地道な活動を行ってきました。中パリが終わった後には、一時的に学友会活動に対するモチベーションがなくなっていました。中パリ実施にかかる書類作成や議事録の作成、申請書類の作成等を行う中で、この活動何に役に立っているのか、なぜこの活動が必要なのかがわからなくなってしまうためです。しかし、そのような時期に五者懇談会に出席し協議を傍聴する中で、私の地道な活動はこのためであったのかという、当時の自身の活動意義がはっきり認識できました。このことから、活動意義の整理や、今の活動が何

に結びつくのかを可視化することの重要性に気がつくことができました。

末席としてはなりましたが、りつくり2022にも関わらせていただきました。具体的な業務としては、総務として備品の発注・管理を行いました。局長補佐として、中央事務局長とマンツーマンの活動が多かった私にとって様々なバックグラウンドの方と関わるだけではなく、協働するというのは初めての経験でした。自身は学友会を俯瞰して見ることでできていると思っていました。まだまだ私の知らない学友会があるということを確認する機会となりました。

〈中央事務局 2022年度～2024年度：財務部員〉

局長補佐と並行して、一回生の秋から今日に至るまで財務部員としても活動させていただいております。具体的な業務内容としては、通年学友会費が正当に使用されているかの監査を行なっています。また、2月から3月にかけては、予算ヒアリングにも参加し、各団体さんと直接お話しさせていただきました。このような財務部の活動を通じて得たキーワードがあります。それは、「還元」です。私は学友会の幅広い部署に在籍し、活動を行っております。そのように活動を行うにあたり活動することが目的ではなく、団体さんや学友会員の皆様へ活動の成果を「還元」することが目的であることを忘れないように、日々の活動の根幹には財務部で学んだ「還元」という言葉を常に胸に抱いております。

〈特別委員会 2022年度～2023年度：学園祭実行委員会財務統括官補佐

2023年度～2024年度：新歓実行委員会会計・OIC副委員長〉

特別委員会では、1・2回生では財務統括官補佐として学園祭実行委員会に所属し、学園祭と団体企画の決算業務に携わりました。これにより、全学行事のあり方や活動意義の一端を実感として知ることができたと考えております。

また、2・3回生では新歓実行委員会に関わり、2回生では会計、3回生ではOIC副委員長を務めさせていただきました。会計としては、単なる業務遂行ではなく、新歓や自身と関わってくださる人々の想いを理解し、それを形にすることの大切さを学びました。OIC副委員長としては、前年の役員経験を踏まえた上で、小西新歓実行委員長が掲げるスローガンの元、活動させていただきました。春新歓では、OIC周辺のマップを作成・配布を行いました。秋新歓では、課外自主活動団体の皆様から動画を募り、それを TERRACE DATE に投影するという企画を行いました。私自身、実務経験は1・2回生で積ませていただいておりますが、自身で企画を行うという試みは初めてだったため、今の新歓実行委員会に何が求められているのか、どのような企画を行えば学友会員の皆様に「還元」できるのか深く考える経験となりました。

〈自治会 2024年度：産業社会学部自治会副委員長〉

自治会には3回生から入会いたしました。今まで、中央パートの中でも特にその中心で活動していたからこそ、自治会目線での学友会を再確認することができたと考えております。具体的な活動としては、副委員長として学生大会や五者懇談会に向け

たアンケート分析や議案の検討等に参加しました。また、自治会としての悲願であった学生同士のピアサポート組織の再建や、来年度産業社会学部が50周年であることから、50周年プレ企画についても関わり活動を行ってきました。このような中で、自治会の活動や在り方を学ぶと同時に、学部生の要求を大学に届け、大学と共に学部を良くしていくことができる自治会の魅力と、以前から問題視されていた主体者不足という点を実感いたしました。

〈常任委員会 2024年度…中央常任委員長補佐〉

3回生では、中央常任委員長補佐にも就かせていただきました。ここでは、役員と同じとまでは言いませんが、それと近い目線で学友会を見るという貴重な体験をさせていただきました。中央常任委員会の方々がどのような業務や協議を行っているか知る機会であり、中央常任委員会や常任役員が何をすべきなのか、どのようなあり方なのかを自身でも考えるきっかけとなりました。中央常任委員長補佐として、1. 〇回生から引き続き、中パリにも関わらせていただきました。本年度においては、〇回生を中心とした運営チームを組み、実務的な業務から一定の範囲内での意思決定に至るまで運営チームに行ってもらいました。私の主な業務も実務からマネジメントと変化する中で、自身のマネジメント能力が足りていないことを実感いたしました。この経験においては、来年度以降の中パリ運営者に引き継ぐとともに、自身のマネジメントスキルについても向上させていく所存です。

## 【立候補の経緯】

このように、私は今までの学友会の活動において、多様な領域で様々な経験を積んできたと自負しております。これにより、私の強みは、多角的な視点で学友会を見ることができることと、考えを実行に移した際の実務処理能力であると考えます。このような私の強みを学友会に還元するために、4回生としてどのような在り方をするべきか検討しました。その結論としてたどり着いたのが、今回立候補いたしました中央常任副委員長の立場です。私は、学友会においてスペシャリストではなくジェネラリストとしてあります。だからこそ、他の役員とは異なり組織に縛られることなく、その都度の状況に合わせて柔軟に動くことのできる本役職が、私の4回生時の学友会でのあり方なのではないかと考えます。

## 【中央常任副委員長としての展望】

中央常任副委員長の責務は、公示及び学友会会則に「中央常任委員長の補佐」と定められております。また、小西次期中央常任委員長と私のやりたいことの方向性が似通っていることから、具体的にどのようなように補佐していくか・中央常任副委員長としてどのような活動を行いたいのかを彼が挙げた方向性や戦略に触れつつ述べていきたいと思います。

### ① 納得感ある活動を行える環境作り

まず、小西次期中央常任委員長の戦略の一つに「学友会における活動意義の整理」というものがありました。この活動意義というのは、学友会が学友会員にとってどの

ような価値を提供できるのかを明確にするための重要なテーマであると同時に、私たちが活動を行う上でも理念となるものです。だからこそ、活動意義がはっきりしていなければ、納得感を持って学友会活動に取り組めないと考えております。納得感を持って活動が行えなければ、活動に対するモチベーションの維持も難しく、さらには活動すること自体が目的となってしまうです。そのため、活動意義を明確に示し、今自分が行っている活動が何につながるのか・どのようところで役に立っているのかを実感できる環境を整える必要があるのではないかと私も考えております。私はこれを実現するために、小西次期中央常任委員長が行うであろう活動理念や方針を再確認するための各取り組みに対して主体的に関わっていきたいと考えております。

## ② 段階に沿った研修制度の確立

次に、「人材を鍛えるための育成方法を確立する」という点について私なりに言及していきたいと思います。現在、春と夏に中パリが慣例的に行われており、今年度では全学自治会が主催するビギナーズ研修等が初めて開催されました。私は中パリに年間関わってきた中で、中央パート同士のつながりの創出という面では素晴らしいものであると認識しております。しかし、その一方で全学年が対象だからこそ、上回生からすれば聞き飽きたような内容の研修になり、低回生からすると学友会の専門用語が多くていまいち理解しきれない内容になっているのではないかと感じます。また、研修形式も基本的には座学でインプットの内容となっています。来年度以降、私の中パリを含む研修を段階に沿ってターゲットを絞ったものに変えていきたいと考



えています。もちろん、つながりを創出できる場の必要性についても理解しています。ですので、各研修ごとにゴールを決め、それを達成できるような研修制度を確立していきたいと考えております。

### ③ 学友会でのキャリアプランの明確化

学友会を活性化させるためには、構成員が学友会での活動を通じてどのように成長し、キャリアを築けるかを明確にすることが不可欠であると考えます。中央パートで活動を行う上で、ただ「大変でしんどい」だけでなく、そこから得られるものや成果を具体的に明確化し、「学友会に入ることによってどんな自分になれるのか」「将来にどのように活かせるのか」をイメージできる環境を整える必要があります。また、私の実体験にはなりますが、活動のモチベーションの一つとして「憧れ」という感情が重要な役割を果たすことがあると感じています。例えば、「この先輩のようにになりたい」「あの先輩と同じ役割に就きたい」という思いが、活動を続ける大きな原動力になることがあります。このような気持ちを後押しするためには、成功体験を共有し、ロールモデルとなる先輩たちの経験や成長を知る機会を提供することが必要であると考えます。さらに、学友会内でのキャリアプランを確立することで、中央パート構成員が中央パートの活動に対してより明確な期待感を持ち、新しい役割や責任を積極的に引き受ける選択肢をとれる環境を整えられると考えます。このように、抱いた憧れを形にできる風土や、キャリアパスを可視化する仕組みを導入することで、学友会全体の活性化していけると考えます。

【最後に】

最後になりますが、本日に至るまで、私の活動にご支援くださった皆様方に改めて心より御礼申し上げます。

私はこれまで学友会で様々な経験をさせていただきました。楽しいことばかりではなく、苦しいことや辛いこともありましたが、いざ振り返ってみるとその一つひとつが私の成長の糧となっていると感じます。学友会は「学生による学生のための自治組織」であると同時に、多様な個々の思いが集まる場でもあります。この「居場所」としての学友会をさらに魅力的なものにするために、自身の経験を活かし、全力で取り組みます。加えて、任期中に顕在化する諸課題に対しても、中央常任副委員長として職務を全うしていく所存です。

以上が、私が中央常任副委員長に立候補するにあたっての所信表明となります。ここまで本所信表明に目を通していただきありがとうございます。どうぞよろしくお願いたします。

次のページより二人目の候補者による所信表明を掲載しています。

併せてご確認ください。

## 中央常任副委員長候補②

経営学部 三回生

川崎 正一（かわさき しょういち）

1. はじめに

この度、2025年度立命館大学学友会中央常任副委員長選挙に立候補いたしました、経営学部3回生の川崎正一と申します。経営学部において、戦略コースを専攻しており、正課では主に企業の目標達成に関わる経営戦略やマネージメントのことを学んでおります。また、専門演習においては消費者行動論に長けている菊盛真衣先生の下で、日々マーケティングでの学問的な事象に関して学ばせていただいております。現在は、ゼミ内のグループワークにて「バーチャルインフルエンサーの笑顔の両面的な効果…不気味の谷現象に着目して」というテーマで論文を作成し、12月中旬に学内で開催されるゼミナール大会に向けて準備を進めております。

学友会中央パートでの活動は、2022年の11月から経営学部自治会に所属しており、2022年度から2023年度に渡って会計を務めました。そして、現在2024年度では委員長を務めております。本所信表明では、これまでの活動の振り返り、立候補に至った経緯、来年度の活動の方向性について述べさせていただきます。

2. これまでの活動の振り返り

2-1. 経営学部自治会での活動（1年目）

私は、本学に入学して1回生の秋から経営学部自治会に在籍し、1年目は会計とし

て学友会活動に携わらせていただきました。入ったきっかけは基礎演習の担当オリターであった当時のオリター団長から勧められたことであり、過去に生徒会に所属したこともあって、その経験を活かせると思い所属を決断しました。経営学部自治会に所属した当初は私を含めて一回生〰〰人の状態でした。一時期流行した感染症の影響もあり、私たちが所属するまでの少しの間、自治会活動が本格的に行われていませんでした。そのため、自治会になったとはいえ、十分に引き継ぎも為されなかったため、自治会は本来どんな活動をする団体で、立場的にはどこに位置する組織で、オリターとはどういう関係で成り立っているか、といったようなことが理解できずにただ在籍している状況が続きました。そして、学友会や自治会の理解が乏しいまま〰ヶ月程経った頃、五者懇談会を当年度中に実施して欲しい旨を知らされました。結果として、反省点も多く不完全燃焼に終わったこの五者懇談会が経営学部自治会を成長させる機会になりました。

当時は五者懇談会の重要性、規模感、プロセスなど知らないことが多く、自団体の過年度の記録や書類を残すものもほとんどなく、前任者だった人からの言伝を当時の委員長経由で知る情報がほとんどでした。そのため、まずは知らないなりに中央委員会や対外協力に参加して、他団体の運営体制や五者懇談会の状況を聞くことで、学友会に対する自身の知見を広げました。また、五者懇談会の準備において学部事務室と学生オフィス、全学自治会の担当の方々のサポートもあり、なんとか五者懇談会を実施させることができました。それでも、五者懇談会内での議論は教員や職員の方々と比べて自分たちはあまりにも本学、本学部について理解できていなかったことで終

始議論するのに苦労した記憶があります。この一連の活動を通して、特に組織内での引き継ぎの重要性を痛感いたしました。

## 2-2. 経営学部自治会での活動(2～3年目)

一年目の経営学部自治会の活動を終え、2年目の経営学部自治会は、止まっていた状態から動き出したものの、現状どのような資源があり、何ができるのかを模索した一年でした。その中で感じたのは、自治会活動で関わる人が多岐にわたることです。この横のつながりを実感できるのは、中央パートの組織として活動をする上での醍醐味だと感じました。五者懇談会では、教員方や学部事務室、学生オフィス、中央委員会やその他委員会であれば、他の学部自治会とのコミュニケーションを図ることができ、その中で自治会活動の幅とそのポテンシャルを知ることができました。

そして今度は、自治会の実行力に目を向けると、学部ごとに人員や状況が異なります。自治会執行部において実働人数が多い学部もあれば、少ない学部もあります。特に経営学部は後者でした。この打開策としては、縦の関係に焦点を当てたことです。具体的に述べると、自治会執行部とオリター団との関わりを強くしました。同組織内の団体だったのにも関わらず、互いにその認識が薄かったため、あまり関わりを持っていませんでした。しかし、そうした関係を打破するために、月に一度の定例会、年一度の自治会とオリター団の執行部が参加する初年次合宿を設けました。結果として、互いにややブラックボックス化した活動が明らかになり、オリター団の人員と企画力を共有できたことや自治会活動の認知、次年度の協力体制を促せたことで、成功した

と言えます。このことから、自団体が現状保持している資源を改めて認識して、それを活用するための行動が必要であると感じました。

この効果もあって、経営学部自治会〇年目の活動では、前年度活動人数〇人だった状況から10人に増員することができました。次のステップとしてこの〇年目は、動き出した組織を継続する組織にすることが目標でした。情報や資料の管理体制をオンラインとオフラインの共用を採用し、不定期だった会議を固定にして議事録や会議メモを残すことで各委員の知識に差が出ないように心がけました。結果として、自治会内におけるこの情報管理や運営体制の見直しは、組織の基盤を固めるフェーズにおいて重要であり、各委員の帰属意識を促し、学友会に対する理解を深めることができませんでした。このように記録が整理・可視化されたことで次の世代が行動を起こす際に大きな助けになると考えています。個人的には、これまでの取り組みが実を結び、経営学部自治会が継続する組織になること期待しています。

### 3. 来年度の活動の方向性

#### 3-1. 自治会一筋でやってきたからこそ見えてくる視点の共有

第一に、次期常任役員が所信表明等で示した、来年度の方向性および戦略についてその精度を高めていけるように、私自身が自治会視点で培ったこれまでの経験やノウハウを共有し、共に検討・実行のサポートができるよう努めていく所存です。また、自治会においていろいろな取り組みを試行錯誤した経験を活かして、次期常任役員が実行する施策が自治会に関連する際は、いかに自治会にコミットメントできるか提案し

ていきます。

### 3-2. 組織内での引き継ぎの重要性

組織内の情報管理と引き継ぎの体制が各団体でさまざまであり、標準化されていないことがこの引き継ぎ問題の要因の一つであると考えます。そのため、一つの取り組みとして情報管理や引き継ぎの体制の標準化を挙げます。しかし、今回述べている標準化というのは、全ての団体が情報管理や引き継ぎ体制を同じやり方であるというのではなく、一定レベルの引き継ぎ体制をまだ築けていない、もしくは築けているか分からない団体に対して、その体制を築けるような知識・方法の提案や相談の場を設けるようなアプローチをしていく必要があると考えます。

#### 4. 終わりに

私自身、これまで中央パートでは主に自治会活動に携わっており、自治会以外の活動にはほとんど関わってきませんでした。そのため、今回の所信表明においても各団体皆様への理解が足りていないことは、重々承知しております。しかし、もし私が当選することができたなら、これからは皆さんとの交流を深め、より多くのことを学びながら活動していきたいと考えています。また、組織の立て直し、体制や基盤の整備を行ってきた経営学部自治会での経験を通じて、各団体に対して自分の持ち合わせるものを提供する所存です。

立命館大学に入学して3年、正課授業や専門演習を通じて学術的なことを学ばせ

ていただきました。しかし、人間は生きていく上で人間力や社会性を持つことも必須であり、この〇年間の学友会における活動が私の人間力や社会性を大きく高め、成長させました。そのため、次の一年は私にとってこの組織に対する恩返しであり、次の世代でも飛躍できるような地盤を醸成する機会であると認識しております。

最後に、次期常任三役と今回選出される常任副委員長とともに、一年間学友会のため尽力したいと考えています。どうぞ、よろしく願います。

投開票日 二〇二四年十二月八日

二〇二四年度立命館大学学友会中央選挙管理委員会